

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：シン エヴァンゲリオン 劇場版

その8

今回のテーマ

シンジの心の喪失と再生について考えていく

前回のおさらい

エヴァンゲリオン Q においては、シンジがこれまで経験してきた相次ぐ喪失を受け入れられず、もがき苦しむ中、より事態を悪化させてしまう。

シンジはその事態に直面し、強い絶望、取り返しのつかない様な罪悪感の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。

今回のシン・エヴァンゲリオン 劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心の再生と成長を描いている様に感じられる。

そしてこの心性が思春期の人々の心の揺れ動き、喪失感それと同時に希望と再

生という点で非常に似通っているものを感じる

喪失という観点でボウルビィの悲哀の心理過程を説明した。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

Q の結末において、シンジは、取り返しのつかないほどの罪悪感に苛まれ、無気力な状態に陥った。外見上は状況が非常に悪化しているように見えるが、心の中では、ボウルビィの喪失過程における③「断念と絶望の段階」に進んでいるように思われる

そこでシンジの心の成熟を進めていく（③→④の移行 または抑うつポジションへの移行）には、シンジ自身を受け止め、抱える環境が必要不可欠である。

2. シンジが目を覚ました時、周囲の状況はどのような反応であったか？

3. 綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変ったか？

4. シンジの心は綾波との交流の中でどう変化していったのか？

絶望に打ちのめされていたシンジの心を受け止める、その母親の様な環境がトウジやケンスケの暮らす第三村であった。彼らに温かく迎えられることでシンジは立ち直り始めるきっかけを作り出した様に思われる。

そのシンジの変化はあまり描かれていないが、綾波が第三村の人々との交流を通じて、それが象徴的に描かれている様に感じられる。

命令にのみ従う存在から、心を持つ存在へと変化していく綾波の姿は、まるで母親から独立し、自分自身の人生を歩み始める子供のように思える。シンジの心

も同じ様になっていったのではないだろうか？

また、その主体的になっていった綾波とシンジが触れ合うことでボウルビィの喪失過程における④離脱・再建の段階へと心の成熟が進んでいき、シンジはケンスケやトウジ達をはじめとした第三村の人々と穏やかな生活を送るようになる。

しかしこの幸福で穏やかな生活は長くは続かなかった。ある日、綾波がシンジの元に訪れる。彼女は音楽プレイヤーを渡すとともにこの村の人々並びにシンジへの感謝の念を伝えると共に「ここじゃ生きられない」と言い残し、力尽きてしまう。このシーンは残酷さゆえに胸を締め付けられる。しかしこのことはシンジにとって今の生活は一時的な避難場所であり、本来の居場所ではないことを意味している。第三村はシンジにとってウイニコットのいう潜在空間これは、シンジの宿命とも重なる。それはヴンダーに戻り、エヴァに乗り込み、父と対峙すること。つまり、エディプスコンプレックスに向き合うことが、シンジの成長にとって不可欠なのだと考えられる。

そしてシンジ自身はエディプス葛藤に対峙するために再びエヴァに乗る決意を固める。

5. ヴンダーに乗り込んだシンジは以前に比べてどの様変わったのか？

再びヴンダーに乗り込んだシンジであったが、ヴンダーの乗組員のシンジに対する思いはQの様な恐怖とも怯えともつかない様子とは違い、鈴原サクラをはじめ、受容的になっている様に見える。とりわけ印象的なのはミサトとリツコの会話である。

リツコ「DSS チョーカー、未装着のままでもいいのね？」

ミサト「罪は自分の意志で償おうとしなければ、贖罪の意味がない」

Qにおいて、リツコはDSS チョーカーに関して「私たちへの保険。覚醒回避のための物理的安全装置。私たちの不信と、あなたへの罰の象徴です。」と言っているが、ここでは不信・罰の象徴のDSS チョーカーを未装着のままの状況をリツコもミサトも受け入れている。それだけ二人ともシンジを受け入れようとする心性に変わっている。そしてミサトの「罪は自分の意志で償おうとしなければ、贖罪の意味がない」という言葉は、何か突き放した言い方ではあるが、Qの

ときと違い、「エヴァに乗る必要はありません」と主体性を剥ぎ取る様な発言をしていた。) シンジを信頼しており、彼が妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行という心の成熟を陰ながら見守ろうと言っている様に感じられる。

そしてアスカとシンジの関わりも変わってきている。

第三村のシーンで、シンジがアスカと対面した時、シンジはもぬけの殻の様な状態で、終日横になっていた。何もせず横たわるシンジに対し、アスカは強い怒りを感じている。このときのシンジとアスカの関係はサド・マゾ的、支配・被支配の関係であり、精神分析的観点から言うと、肛門期的関係であった。

しかしその後、シンジが成熟し、ヤマト作戦の戦闘配備前にヴンダーでアスカ(激しい戦いになると予想され、死んでしまうことも覚悟したであろう)とシンジが再会した時の二人の会話は共に成熟した関係になっていることを窺わせる。

アスカ「最後だから聞いておく。私があんたを殴ろうとした訳、分かった？」

シンジ「アスカが、3号機に乗っていた時、僕が何も決めなかったから。助けることも、殺すことも。自分で責任、負いたくなかったから」

アスカ「ちっとは成長したってわけね」

アスカ「最後だから言っておく。いつか食べたあんたの弁当、おいしかった。あのころはシンジのこと好きだったんだと思う。でも、私が先に大人になっちゃった。じゃ」

このシーンではシンジの心の成熟が認められる。自身がその時なぜそうしてしまったのか？そしてその行動によってアスカを如何に傷つけてしまったのか？ということを理解し、自分が責任の元であるという発言である。つまりシンジは抑うつポジションになり、現実を受け入れ、一人の人間として成熟している。

そしてアスカも成熟している様を感じる。最後のアスカの言葉で「大人になっちゃった。」という言葉は、シンジ・綾波（もういなくなってしまったが）との

強い結びつきからの断念（「シンジのこと好きだった」と過去形で言っている）であり、それはエディプス葛藤を受け入れ（断念）、新たな道へ進もうとするアスカの心性が描かれているように感じられる。そしてアスカのこの言葉はシンジへの別れの言葉でもあるが、なにか今までの強がっていたアスカとは異なり、寂寥（せきりょう）の念が感じられる。

だからこそ、その後、マリはシンジに対して

マリ「よっ。君はよくやってる。偉いよ。碇シンジ君」

と言い、

アスカには

マリ「姫、ちっとはすっきりした？」と言い

アスカ「そうね。すっきりした」と返したように感じられる。

れる。

このようにシンジはこれまで自分の周りに起きたこと、そして心身の発達によって生じた喪失を受け入れ、成熟し、一歩ずつ大人の階段を登っている。そうしてシンジは父と対峙する心の準備を着々としているように感じられる。

その後、ヴンダーの乗組員はネルフ本部にヤマト作戦を行い、総攻撃をしかける。

6. シンジとヴンダーとの葛藤

ヴンダーはヤマト作戦を行い、総攻撃を仕掛けるが、作戦はうまくいかず、アスカは式波のオリジナルによって13号機に連れ去られてしまう。そしてヴンダーも制御システムを乗っ取られてしまう。そこにネブカドネザルの鍵を使い、人間を捨てたゲンドウがヴンダーの前に訪れ、ヴンダーの主機であった初号機を奪い、第13号機に乗り込みさらに深層の「マイナス宇宙」へと向かってゆく。それを見たシンジはエヴァに乗ってゲンドウを追うことをミサトに願い出る。

その後のシーン

シンジ「ミサトさん。僕が、エヴァ初号機に乗ります」

シンジ「綾波が消えた帰り道、加持さんに教えてもらった土の匂いがしたんだ。

ミサトさんが背負ってるものを、半分引き受けるよ」

ミサト「そのためには、碇ゲンドウと戦うことになるわよ」

シンジ「僕は、僕の落とし前をつけたい」

ミサトは無言でD S S チョーカーを差し出す。シンジは無言でそれを受け入れ、自ら首にはめる。

ミドリ「ちょっとやめてよ！ 冗談じゃない、まさかエヴァに乗せるつもりじゃないですよね」

ミドリ「こんなことになるんじゃないかと思ってた。艦長、この状況なら無条件発砲許可でしたよね」

ミドリ「疫病神！ あんたの起こしたニアサーのせいで、私たちの人生めちゃくちゃよ。全ての元凶、あんたら親子だけは絶対に許さない」

発砲が、された。それはシンジの足元をかすめて、鉄板を弾いた。しかしミドリの銃弾ではなかった。

ミドリ「はっ、サクラ！」

サクラ「碓シンジはエヴァには乗りません。碓さんはエヴァに乗って、みんなを不幸にして、自分自身も不幸になったんや。だからもう、碓さんはエヴァには乗らんのです」

シンジ「いえ、サクラさん。僕をエヴァに乗せてください」

サクラ「無茶言わんといて碓さん。怪我したら、もう乗らんで済みます。痛いですが、エヴァに乗るよりはマシですから、我慢してください！」

サクラがぎゅっと両目を瞑った。そして彼女の銃が乾いた破裂音を立てた。

ミサト「うっ」

リツコ「ミサト！」

サクラ「艦長！」

マコト「ミサトさん！」

ミサト「いいのよシンジ君。十四年前、あなたがエヴァ初号機に乗らなかったら、私たちはその時、既に滅んでいた。だから感謝しているの。その結果、ニアサーが起こされたとしても――。シンジ君のとった行動の責任は全て私にあります。現在も碓シンジは私、葛城ミサトの管理化にあり、これからの行動の責任を私が負うということです。私は今のシンジ君に全てを託してみたい」

サクラ「そうや！ 碓さんは私らを救ってくれた恩人や。けどうちらのお父ちゃんもニアサーで消えてもうたんやぞ！ 碓さんは恩人で仇なんや！ もうこうするしかないんや！」

ミドリ「もういい！ もういいよサクラ。もう明日生きてくことだけを考えよう。もう――何やの」

(中略)

ミサト「碓シンジ君。父親に息子ができることは、肩をたたか殺してあげるこ

とだけよ。加持の受け売りだけど」

シンジ「ミサトさん、加持リョウジ君に会ったよ」

ミサト「元気だった？」

シンジ「うん」

ミサト「そう。良かった」

シンジ「すごくいいやつだった。ちょっとしか話してないけど、僕は好きだよ」

ミサト「ありがとう。必ずサポートする。頼むわ、シンジ君」

シンジ「うん。ミサトさん、いってきます」

ミサト「行ってらっしゃい」

【考察】

ミサトは「碇ゲンドウと戦うことになるわよ」と言ったが、これこそがミサトとリツコとの対話で語られた「罪は自分の意志で償おうとしなければ、贖罪の意味がない」と繋がってくる。序からこれまでシンジは色々な局面で現実から逃避する、一方で、「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ」と何度も言う様に現実に向き合うことに葛藤し、ずっと悩み苦しみ続けてきたと考えられる。ミサトの言葉

はシンジ自身の現実に向き合う覚悟があるのか？と問っている。それに対しシンジは「僕は、僕の落とし前をつけたい」と覚悟を示し、自ら自分の首に DSS チョーカーをはめる。

その行為が通過儀礼としての首輪を授かった様に見える。そして首輪はキリスト教において聖職者の象徴であり、神の軛（くびき）を象徴するとも言われている。神の軛（くびき）とは、神の教えに従い、神に仕えることを意味する。聖職者は、首輪を着用することで、神への奉仕を誓っている。

そしてこのアニメで考えたとき、シンジ自身が自身の暴走をコントロールしようとする意思があるという印であり、以前は「自己の感情に飲み込まれ、覚醒リスクを抑えられない（Q のリツコの言葉）」形で暴走していた様に、シンジの心の中にある色々な内的対象がバラバラの状態であった（つまり妄想分裂ポジションの心性）。今のシンジは主体性を持ち、自分の責任のもとに置き、これまでの贖罪の念のなかで償い（抑うつポジションの心性）そしてエディプス葛藤に向き合おうとしている（それが神の教えに従い、神に仕えるということにも感じられる）。このシーンでは彼の心の成長を描いているが、それを信じられないミドリとサクラがいる。しかしそれはシンジ自身の心のなかで、依然として自身の

成長を阻み、成熟し、心が統合されようとしていくのを壊そうとしている部分がまだ若干残っている様にもみえる。

ミサトはサクラの銃弾を受け、怪我を負うが、ミサトが成長を阻もうとする攻撃性を受け止めた様にも感じられる。それは母親的とも感じられる。(そこでサクラがシンジに対して愛憎両価性を抱くのが印象的である。) そしてその後のシンジとミサトのやりとりが、暖かく何か旅立つ前の母と子の対話をしている様に感じられる。

→そしてシンジはマリの改 8 号機に同乗してゲンドウを追うためにマイナス宇宙へと突入し、その世界でゲンドウと対峙する。

7. シンジと父との対峙 父殺し

マイナス宇宙の中でシンジは父ゲンドウと対峙する。そこでシンジはゲンドウとぶつかり合う。その中でシンジとゲンドウはぶつかり合いながらも交流をしていく。それはシンジがこれまで触れることを怯え距離をとってきたものであり、シンジの殻であり、A-T フィールドである様に感じられる。

ゲンドウ「ほう。希望の槍カシウスと変わるか」

シンジ「もう、やめてよ父さん！ あ——」

ゲンドウ「駄目だ。私には、成すべきことがある！」

ゲンドウは無言を言わさぬ迫力で、初号機といっしょに時空の深部へと落ち込んでいく。そしてゲンドウとシンジはゴルゴダオブジェクトに衝突する。

1) ゴルゴダオブジェクトとは

ゲンドウが次の様に言っている。

人ではない何者かが、アダムスと六本の槍とともに神の世界をここに残した。私の妻、お前の母もここにいた。全ての始まり。約束の地。人の力ではどうにもならない。運命を変えることができる唯一の場所。

ゴルゴダの丘：イエス・キリストが十字架に磔にされたとされる場

→キリスト教徒にとって、苦しみや悲しみ、そして救いの象徴になっている。イエスがこの地で自らの命を捧げることで、人類の罪を贖い（あがない）、救いの道を開いたと信じられている。

